

新川通信

第7号

題字 佐藤 大作

平成26年2月15日発行

巻頭言

国土交通大臣政務官

中原 八一

越後新川まちおこしの会の皆様には、日頃から格別なご厚情を賜りまして、心から感謝申し上げます。

皆様には新川の歴史を掘り起こし、大切に語り継ぐとともに、まちの活性化に取り組んでおられます。皆様の取り組みにより、改めて新川の歴史に気づかされ、新川やこの地域に愛着や誇りを感じることに繋がっていると思います。皆様の素晴らしい活動に地元の一人として有難く心から敬意を表します。

私にも新川には多くの思い出があります。小学生の頃、よく魚釣りに出かけ、春には西川水路橋脇にある「余水吐」(よすいばき、増水時に西川の水を新川に流す)にタモ網を持ってのイトヨ獲りは胸躍るものでした。獲れたイトヨは炭火であぶり、醤油を付けて食べましたが、痛かったヒレのトゲが思い出されます。また内野祭りになると新川で花火があがり、内野小学校の裏山(今は住宅地に)から多くの人達が恒例の花火を楽しみました。

さて、かつて西蒲原の川はたびたび氾濫し、「三年に一作」と言われたほど、コメの収穫は非常に困難なものでした。食糧不足の中、安定的にコメを生産することは西蒲原の農家にとって悲願でした。

そこで新川を開削するため、各地から大勢の工事関係者が集まり、見物人まで詰め掛け内野に酒屋や料理屋ができ、茶店や下駄屋が軒を並べて繁盛するようになりました。そうして今日の内野の町の基礎が創られたと教えられてきました。

200年前に地域住民の力によって成し遂げられた新川開削という一大事業がなければ、今日の西蒲原地域の農業の発展や水害の無い安全な地域となることはなかったであらう。

近年の異常気象は、全国各地で集中豪雨や台風、地震、竜巻など様々な災害を引き起こしています。昔から私たちの暮らしは、自然災害との戦いでありました。そして今後も災害からの被害を防ぐために、不断の努力を続けていかなければなりません。

昨年の臨時国会では、国土強靱化基本法をはじめ、主都直下大地震対策特別措置法、南海トラフ地震対策特別措置法などの法律を成立させ、いかなる災害にも強い国土を創るとともに、近い将来に予測される大地震に備える法律が整備されました。

私も昨年10月から国土交通大臣政務官を拝命し、国土を守る仕事に就かせていただいております。これからも、ふるさと新潟と日本のために微力ではありますが、全力で頑張っております。

結びに、越後新川まちおこしの会の益々のご発展と皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

* * * * *

ほどほどがよい

越後新川まちおこしの会

会長 松岡 長孝

ほどほどの人生が良い。花は、半開き、酒はほろ酔い、ただあくせくかけずり回るだけでは、自分を顧み、心を遊ばせてリフレッシュする事が出来ず、人間としての包容力に欠けてしまう気がする。時としては、悠々たる境地に浸る事は、重い責任を負った人こそ必要と思う。

又、世俗に生きているうちは、のべつというわけにいかないが、時にはなまぐさい欲望を忘れて、ゆったりと空を仰ぐゆとりを持ちたいものである。

私は特別外出の用がない休日は、朝寝、朝風呂、朝酒で、小原庄助のような心境になる。今日は、休みなんだという実感がして極めて快適で、爽快である。この休養が明日のエネルギー源になることは、確かで、数十年実行している。

これが、私のほどほど人生かなとおもっている昨今である。

新川こそ「わが原風景」

～新川で死にかけ、新川から命をもらった～

フリーライター

古俣 慎吾

60年ほど前の夏の日の午後、ぼくは新川でおぼれて、ほとんど死にかかっていた。

6歳のときのことを、見てきたようにはっきり思い出すことができるのは、そのときのシーンを母から聞かされ、何度も頭の中で反芻したからだろう。

その日、へびが出た。友だちと土や棒きれで追い回し、家へ帰って「かあちゃん、手を洗う」と声をかけた。わが家は、家の外の井戸を使っていたので、水をくんでもらう必要があったのだ。

「川へ行って洗え。おばちゃんがいるから」

伯母と話している母の声が聞こえた。

新川には畳2枚分ほどの洗い場があり、近所の人は野菜やおしめなど何でもここで洗っていた。子どもでも、川で手を洗うのは普通のことだった。

洗い場にかがんで手を伸ばす。どんなはずみだったのか、一瞬後には転落していた。その光景を、弟をおぶっていた従姉が土手の上から見ていた。

「慎吾ちゃんが落ちた」

裸足で転がり出てきた母は、土手をすべり降り、どこ、どこ？と洗い場にカエルのように腹這いになって川面に目をこらすが、濁って見えない。

ぼくは、体を反転させながらもがいていた。その足の裏が、ちらっと見えた。母は飛び込み、目と口を閉じ、両手を伸ばして水の中を探った。数秒後、ぼくは母の腕に抱きかかえられた。

* * * *

手元にセピア色の写真がある。乳母車に生後5ヶ月の末の弟。そばに、はにかんだ表情で6歳のぼくが立っている。写真の裏には「慎吾が新川で死にそうになった日の翌日」と書かれた母の字が見える。

母は泳げず、伯父（母の兄）に「泳げないのに飛び込むなんて」とこっぴどく叱られたという。この文章を、母はどんな思いでしたためのだろう。もしかしたら私も死んでいたかも……。

そのことを尋ねると、今年96になる母は「みーんな忘れてしまった」と遠くを見る目で言った。

死ぬような思いをしたにもかかわらず、その後もぼくは新川で遊び続けた。大人たちもとやかく言わなかった。物心ついた頃から新川は子どもの遊び場で、新川で遊ばせることでリスク管理の意識を身につけさせようとしていたようだ。実際、仲間のほと

んどが1度は新川でおぼれた体験を持っていた。

フナやコイ、ニゴイ、ハゼ、ウナギ、ナマズ、カワエビやカワガニ……。新川にはおびただしい数のサカナがいた。日の出とともに釣り竿を持ち出し、学校から帰ると暗くなるまで釣り糸を垂れた。小学3年の夏休みにはライギョを22本も釣り上げた。投網やハエナワ、四つ手網で漁をする大人たちもいた。大萩橋からは、夜なべで漁をするヨーモチゴヤ（魚待ち小屋＝四つ手網漁）が見えた。「ぼくのユメはヨーモチゴヤに泊まって魚をとることです」と作文に書くほど憧れたものだった。

* * * *

中学生の頃から川で遊ばなくなり、東京オリンピックの年に上京した。その後、内野には新潟大学が移転してきて、スイカ畑や田んぼ、松林が宅地に変わった。帰省のたびに町の変貌ぶりに驚かされた。2年前、48年ぶりに実家に戻ってみると、新川の風景も変わっていた。護岸工事がなされ、桜のトンネルはメタセコイヤの並木に変わり、川向こうには宅地ができて、弥彦山も見えなくなっていた。

でも、蒲原平野を吹き抜けてくる風や、新川の流れはかつてのまま。日々、風の音を聞き、もの言わず流れる新川を眺めているうち、この川で命を失いかけて、この川から蘇生した自分にとって、新川こそがぼくを支えている「風景」なのだと気がついた。どれくらい残されているかわからないが、天からもらったこの命、大事に生ききらなければならない。

（ブログ「新川悠々亭日乗」もお読みください）



かつての桜のトンネルはメタセコイヤの並木に

「ヘルプマン」上演に寄せて

日本福祉医療専門学校

星 恵美子

超高齢社会を迎え、介護福祉士の人手不足が大きな社会問題となっている。最近のメディアでの介護現場の深刻な状況の報道は、確かに事実ではあるが、一方で、こんな逆風の中、高齢者ひとりひとりの豊かな人生を切り拓くことを目指して学ぶ若者たちの存在も忘れてほしくない。

日本福祉医療専門学校の2年生は、今年も「表現活動」という授業で、くさか里樹原作「ヘルプマン」（介護学生編）を上演する。

「ヘルプマン」は講談社の『イブニング』に掲載されている介護福祉をテーマにしたコミック。くさか氏は、丁寧な現場取材で、認知症・老人の性・外国人ヘルパー・孤独死等、様々な角度から介護問題を取りあげ、読者を様々な感動で満たしながら、介護の本質論に迫る。（現在24巻まで完結）

コミックの巻末に掲載された、介護界のカリスマ三好春樹氏（生活リハビリ研究所主宰・理学療法士）や「がんばらない介護生活を考える会」の鎌田實氏（諏訪中央病院やすらぎの丘施設長） 葭田美知子氏（NPO法人メイアイヘルプユー理事）、「高齢者虐待」（中央新書）の著者で読売新聞社会部、小林篤子氏からの寄稿等が、この作品のクオリティの高さと注目度の証だ。

「ヘルプマン」の上演を通して学生に獲得してほしいことは、①多くの問題を抱える介護だが、やりがい・生きがいある仕事であると確信をもち、今後の学びや実践の動機付けにする②利用者との関わりが軸となる介護現場で、恥ずかしがらずに自己表現でき、明るく解放的な、利用者に安心感をもたらす援助者となるベースをつくる③自分の姿を改めて認識するという「自己覚知」と、「チームワーク」がなければ完遂できない介護現場で他者との協力連携のできる力等、対人援助の専門家としての資質の涵養への積極的姿勢に他ならない。

漫画から脚本を起こし、読み合わせ・立ち稽古・舞台稽古と進む中、学生はおそらく、これまでの人生で味わったことのない新しいスタイルで、様々な葛藤を繰り返し、力を合わせハレの舞台に向かって

進んでいる。

例年、当初は多くの学生が、人前での上演に臆したり、恥ずかしがったりするが、優れた原作と、上演に向け、個人ではなく集団で力を合わせる体験、そして、何よりも自らの未来の介護福祉士への限らない希望に支えられ、「掘った、通した、新川掘削物語」で演技指導の協力を得た、小林へろ氏の的確な専門的指導によって、それらを見事に払拭していく様子は、圧巻である。

この会報が出来上がるころ、彼ら一人一人はどんな思いを胸に、学び舎を巣立つのであろうか。



積極的に地域に関わってくれる福祉医療専門学校生

EMによる洗堀の水質浄化

浜倉 剛

内野町内を流れる洗堀の水質を浄化するため、本年度は、EM（有用微生物群）を用いることになりました。平成25年5月15日（水）～12月25日（水）、1週間おきの作業は、正直シンドイものでしたが、結果からみて苦勞の甲斐があったようにおもいます。具体的な作業内容は、次のとおりです。

1. EM2次発酵液づくり

20リットルのポリタンク（2個）に8分目まで水を入れ、その中に、EM1次発酵液・こめぬか・塩・糖蜜・EM-1（有用微生物土壌改良資材）を加え、サーモスタット機能を有した発熱器により水温を34～40度に保って、発酵させる。（期間は2週間）

2. EM団子づくり

土にEM2次発酵液・こめぬか・セラミックス（菜園EMパウダー）を混ぜ、直径8～10cmの団子状にまるめ、風通しのよい所に保管して、発酵させる。（期間は2週間）

作業日が雨天だった時は、土の採取ができなかったため、団子づくりは中止しました。

3. 発酵液撒布と団子投入

洗堀の上流域（最上流部）と中流域（朝妻電機裏）にEM2次発酵液を撒布し、EM団子を1m間隔で投入しました。

8月以降は、下流域（松岡会長の作業場付近）で悪臭を感知したため、同地点でも撒布と投入を追加しておこないました。

4. 結果

洗堀では、毎月1回、水質簡易測定器「パックステスト」等による水質検査を実施しています。作業開始後の8月と作業終了後の1月におこなった検査の結果は、以下のとおりでした。

項目	透視度 (cm)		COD	
	H 25.8	H 26.1	H 25.8	H 26.1
上流域	8	100	8	2
中流域	20	23	8	5
下流域	10	11	8	4

中・下流域の透視度を除けば、いずれも作業後が良い結果を得られました。ことに上流域の結果は、驚異的でした。以前、上流域は、新川からポンプアップされた水が到達しないため、水質の悪化に悩まされていました。

しかし、雨水が流下するだけの、いわば半閉鎖的な水域において最良の結果が得られたということから、こうした水域においてこそEMの水質浄化能力が存分に発揮されたと考えられます。

周辺住民を悩ませていた夏場の悪臭が消えるとともに、目視による調査でも、洗堀の川底の堆積物も分解がすすんでいることが確認されました。



EM2次発酵液を洗堀の最上流部から流す

5. 今後の課題

上流域において、EM2次発酵液とEM団子の投入から暫くして、水草が発生しました。

この水草も水質浄化に効果があったと推測されますが、この種類と浄化能力、発生した原因、中・下流域では発生しなかった原因等について、専門家の調査が必要であると考えます。また、川底の堆積物がどの程度分解されているのか、過去のデータと比較しなければなりません。

次年度以降もこの作業を継続するのであれば、上流の半閉鎖的水域において最も効果があった事実をふまえ、中・下流域の浄化のあり方を検討する必要があります。

さいごに、このたびの作業に従事された皆さまお疲れ様でした。ご指導くださいました美土郷の会の山上さん・石栗さん、どうもありがとうございました。この作業のリーダーとして活躍され、平成26年1月に逝去された藤巻さんのご冥福をお祈りいたします。



EM団子

名優たちの新川開削劇

丸山 久子

壇上の役者は、松岡会長・小泉事務局長・佐藤次長・浜倉委員ほか何時もの顔馴染みの役員の方々・・・でもこんな顔は見たことがない～ 皆さん緊張し真剣そのものである。

掘った、通した！ 新川開さく物語と題して、10月17日、西地区公民館で新川の開削に関する歴史劇を上演した。

山岸委員の司会で幕が開き、観客数は約100名。当時の衣裳を身に着け、頭は自作カツラ。少々格好をつけて壇上にあがる。しかし、熟れない役者・ツイ台詞を忘れる。でも、そこからがユニークである。戸惑った顔を見せながら扇子やハンカチで隠したメモを見る。観客もその瞬間、息をのみ、自分のことのように緊張する。

困った！ 頑張れ！ と心の糸が交差する。そして、演者の口が開くと観客もホットし、あっという間に会場が一本の糸で結ばれたように一体になった。

さらに地域の方々や学生さんが加わり一層ムードを盛り上げる。しかし、何と云っても素人の演劇、所々演者の戸惑いがみられる。それを進行役の星弁士がピシッ！と絞める。

このような皆さんの熱演は、プロの何倍も観客の心を引きつける効果があり、プロの名優でも、ここまで観客と心が一体になれる演劇などは滅多にないのではなかろうか・・・これが本当の名演技と云うのだろう。

そして、はらはらドキドキしながら新川の歴史を改めて考えるよい機会になり、何よりも楽しんだひと時であった。

観客の声

- ・ 久しぶりに引きこまれる演劇を観た（終るまで自分のことのようにドキドキだった）
- ・ 熱演が伝わり、こんなに一生懸命に見たのは久しぶりである
- ・ この機会に新川の歴史を真面目に考えてみたいと思う。
- ・ 上手い演技でないのがよかった
- ・ 先代の思いが乗り移った感じだった



伊藤五郎左衛門に扮した佐藤さんをはじめとする名優

今でしょう！

この言葉は、今年の流行語大賞の1つである。新川開削劇も正に“今でしょう”を感じるものであった。今秋は開削当時を思わせる著書が次々と出版され、多くの方が新川に関心を持っているという。

例えば、田子了祐著・越後における真宗の展開と蒲原平野。そのまえがきでは《・・・現在の新潟県の平野は田地が広がっているが、それは近世・近代以降に放水路が作られ、海に水が放出されて以後に出来上がった風景である・・・》 ・斉藤文夫著・蒲原 昭和の記憶 カメラが捉えた昭和の残像。その他・新潟県の地域呼称・越後の民俗 ほか。

今回の新川開削劇は先人の思いを伝え、地域の方々に改めて考える機会を与えていただいたように思う。

企画そして準備、当日の演技等々、ここまでの行事をやることはかなりのご苦労があったことであろう。でも、来る200年の記念行事に向けて素晴らしい一歩を踏みだしたと感じた。

名優の方々に改めて拍手喝采！



次回の新川劇を期待する声が大きかった

豊かな自然再生への道

美土郷の会

山上 智恵子

私は、三条を中心として活動している環境改善グループ美土郷の会の山上と申します。

当グループは、次世代に良い環境を残したいという強い思いで集まった仲間 25 名です。活動内容は、EMを活用した情報交換、大浦小学校のプール清掃、八幡宮の堀と池の浄化等に取り組んでいます。

このたび石栗さんの紹介により“越後新川まちおこしの会”の藤巻さんと出会い、昨年 5 月より内野地区での 5 校のプール清掃と新川につながる洗堀の EM による浄化に携わせて頂いております。本当に感謝申し上げます。

すでに河川浄化の取り組みは、全国で展開されており、第 7 回総会で EM 研究機構技術指導員の星野豊さんによる記念講演、東京日本橋川浄化活動で皆さんに紹介されました。



松岡会長宅の駐車場で EM 製作の皆さん

ここでもう一度、EM について説明したいと思えます。EM は、安全で有用な微生物だけを集めた多目的微生物資材です。この技術は、比嘉 照夫博士によって 1982 年に基礎が確立され、今現在も改良が続けられています。

微生物とは、地球上で一番最初に生まれた目に見えない小さな生き物のことです。地面の中、水、空気中、そして私達の体の中と地球上に微生物がいないところはないと言ってよいでしょう。

いろいろな微生物がそれぞれ役割を持って働いてくれて、善玉菌は食べ物を発酵させたり、水を綺麗にしたり、悪玉菌は腐らせたり、病気の原因を作ったりと私達の暮らしにとっても深くかかわっていることを忘れてはなりません。

しかし、化学により私達人間の生活が豊かになり、自然環境が変わり悪玉菌が増えすぎたり、善玉菌が

減ったりとバランスが崩れたことになり、微生物がきちんと役割が果たせなくなってしまいました。

特に善玉菌の減少は、生態系のピラミッドが壊れる原因となり、川や海がヘドロ化しました。でも、心配は要りません。皆さん一人ひとりが微生物の大切さを理解し、善玉菌である EM を作り、どんどんと自然に流すことで改善されることが解ってきました。現在、洗堀ではこの効果を利用し、5 月から毎月 2 回 EM 発酵液、EM 団子(より長く EM 効果を停滞させる)を定期的に投入していただいております。

また、内野小学校では藤巻さんから新川の歴史についてお話していただきました。目を輝かせ、とても興味を持って聞いてくれていた事が印象的でした。

では投入結果はというと当初のひどい臭いはなくなり、汚れも激減。昨年末にはとうとう透明度が 100 cm となりました。とても感動しました。

EM が地場にいる微生物達と一緒に、汚れ・臭いの原因を作っている悪玉菌を減らしたのです。善玉菌である EM を流すといった正しい選択が実を結んだのです。継続は、力なりです。

ぜひ、ご自宅近くの洗堀をご覧ください。綺麗です。でも油断しないで下さい。流さなくなると以前の汚れた臭い洗堀に戻ってしまいます。

毎日の家庭から流すことも出来ます。大切な事です。このたび藤巻さんの訃報は活動が軌道にのってきただけにとっても残念です。



藤巻さんと一緒に洗堀に EM 菌を投入

年末に石栗さんから藤巻さんのお陰で洗堀の浄化がうまくいっているという報告に泣いて喜んでいらっしゃったそうです。この気持ちをつなげていただけるよう是非とも、より一層、会の結束を固くされ、今後も継続されていかれることを切に希望致します。

EM先進地視察

小泉 勇

今年、洗堀にEM(有用微生物群)を用いて河川浄化を実施することになりました。この作業中の平成25年7月に先進地の南相馬市の酪農家を見学しようと武藤麻央さんに実践水田と酪農家を紹介していただきました。

《瀧澤牧場の概要》

瀧澤家は、農家・酪農の複合経営で、説明して頂いた瀧澤昇司(40才代)さんは3代目。

現在酪農は、乳牛32頭、育成牛13頭、震災前は、50頭。水田は、除染中のため休耕。牧場の南相馬市原町地区は、原発より30km圏内。



南相馬市の山手にある瀧澤牧場にお邪魔した当会の会員 震災直後

東日本大震災直後は、湧水が止まり沢水でしのぎました。続いて福島原発1号機、3号機の水素爆発。しかし牛の世話をしなければならぬので、避難勧告が出た後も残りました。

牛乳の餌は、22年のサイレージ(乾燥牧草)飼料が保管してあったので、それで何とか乗り切りました。搾乳は、1日1回、搾った牛乳は、全て捨てざるを得なく、泣きながら捨てたそうです。

搾った牛乳を自主検査したところ、震災当時は、20ベクレルであったが、翌月の4月は、不検出(ND)、そして牛乳の出荷は、3か月後6月再開。自家産の牧草は、汚染されているので輸入牧草に切り替えた。

しかし、瀧澤さんは、経営を震災前に戻そうと、牧草と牛乳との放射性物質濃度の関係を調べた。このころ1頭は、汚染した牧草を与えたりした。

牧草地は、7,000ベクレル(2011年当時の国の基準は5,000ベクレル)。深さ30cmの土を反転した。汚染牧草(64ベクレル)を与えると、牛乳は、9ベクレル(出荷レベル以内)であったが、牛乳メーカーからND(不検出)を求められた。

・セシウムの減量方法

情報で光合成細菌が有効とのヒントを聞く。

その時、隣家の馬場EM研究会の羽根田さんより(株)EM研究機構の紹介を受ける。EMには、光合成細菌が入っているという事でEMに取り組み始めた。

試験

餌の汚染牧草にEMを与える

EMボカシペレット 100g 1日2回

EM活性液 500ml (EM・XGOLD5%液)

結果

EMを与えた乳牛の牛乳のセシウムは、2か月後に、9が4.5ベクレルに下がる。その後は、低い値で安定。この結果。全頭にEMを与えた。

現在、牛乳だけでなく、堆肥とか、この堆肥を撒いた牧草の放射線量をEMで減らせないか。サイレージをEM発酵させたらどうなるか、試行錯誤している。

EMの有効性

牧草地では、化学肥料ばかりでなくEMを添加したほうが、セシウムが下がる。

床にEM活性液を散布したところ、畜舎の臭いが無くなり、ハエもわかなくなった。

隣家より今は臭いがほとんどしなくなったと褒められた。

稲作の実験田

瀧澤牧場の手前で青々とした、水田に立ち寄り説明がありました。収量は、確かに上がっているようです。そのため既定のEM活性液を数年間散布すると効果が出るそうです。細かい数字を説明して頂きました。有意義な見学になりました。武藤さんおよびお手配いただいた皆さん有難うございました。

参考：健康生活宣言19号2013.9



EMについて武藤さんに質問の藤巻さん、右端は瀧澤さん

追悼 藤巻 英弥先生

佐藤 正人

1月10日朝8時に電話が鳴った、受話器を取ると「藤巻ですが昨晚、主人が亡くなりました」エー！お見舞いに伺ったときにはあんなに元気だったし、ついこないだまで病院から何度も電話をくれていたのに、とても信じられませんでした。受話器を置き直ちに、藤巻家へ駆け付けると仏間に眠っている藤巻さんの顔の白布を開いた。「どうしたねー」と語りかけてくるような穏やかな顔をしていました。まもなく松岡会長や星先生も駆け付け、一同がこんなに早い別れが来たことを非常に残念がっておりました。



初代会長の佐藤大作さん挨拶と、司会の藤巻さん

越後新川まちおこしの会や内野盆踊りを楽しむ会と藤巻さんの活躍場面が次々とよみがえってきます。司会の藤巻さんでとおり、独特な山形なまりの内野弁で語り、新川音楽祭ではハプニングが生じて、決して慌てずに対応する能力には、本当におそれいったのは私だけではなかったと思います。

またいろいろな懇親会でも司会をして頂き、ユーモアたっぷりで皆さんを和ませながら会を進めるテクニックは、他に類を見ないものがあり皆さんから絶賛されていました。数年前からEM菌による水の浄化に一生懸命取り組み、近隣の小中学校のプールの洗浄や洗堀をEM団子を作り散布しての浄化活動は率先して真剣に取り組み、洗堀の透視度を100cmと、すばらしい実績をあげました。



歴史ある洗堀を率先してきれいにしていた藤巻さん

昨年7月の福島研修では南相馬市でEM菌活動を行っている武藤さんを藤巻さんのEM菌つながりでの紹介して頂き、EM菌での田んぼの除染と稲作や酪農状況を見学させていただきました。放射能で汚染されてしまった先祖から受継いだ土地を必死になって除染し、生き抜こうとする姿を目のあたりにして胸に込み上げてくる熱いものを感じました。

とにかく体を動かすことが大好きで、テニスはサークル仲間と週3回もこなし、畑での野菜作りでは鋤使いの達人で草刈も鋤で行い、うね作りも名人級でした。角田山麓の柿団地でも二十数本の柿の木を管理し、毎年秋には美味しい柿を頂きました。また奥さんと一緒に遠方に出かけては、山古志や松之山で田植えと稲刈りに参加したり、山菜採りや山古志闘牛場の駐車場のボランティアと県内各地で活動し、昨年10月に当会で山古志の中山隧道視察と闘牛見学の際には、入院中で参加できませんでしたがコースの計画と段取りを付けていただきスムーズに廻ることができました。木籠（こごも）の郷見庵での昼食で美味しい郷土料理を食べさせてくれた、おばさん達や闘牛会の松井会長も藤巻さんの病状を心配し、一緒に来れなかったことを、皆さんが非常に残念がっていました。



芸術文化交流ふくしま&うちで、笑顔で話をする藤巻さん

趣味が多才で昔はパチンコに麻雀、囲碁は段持ちでした。帰りが遅くて、だいぶ手をやかされたとおばさんが笑って言っていました。若い教師時代から囲碁が上手かったので、よく校長と碁を打ったもんだと話していました。それから山形大学時代には仲間とウクレレバンドを組んでハワイアン音楽を楽しんでいたそうです。ですから歌も好きだったのがうなずけます。カラオケの18番は「北国の春」、また非常に難しい山形民謡の「最上川舟唄」を歌わせたら最高に上手く皆さんから拍手喝采でした。



新川の畔での宴会で内野盆踊りを踊る藤巻さん

内野盆踊りを楽しむ会でも長年にわたり会長を歴任され、毎年夏に開催される内野盆踊り大会でも、準備から司会や唄に踊りと大活躍され大会を盛り上げ、我々会員を先導してくださいました。また一昨年の盆踊り大会では、内野の盆踊りの他に、福島からの避難者の皆さんを招いて相馬盆唄と一緒に踊り藤巻会長が「ハーアー、今年しゃ豊年だーよ..」と元気で歌った姿が目に見えてきます。

思いではつきません。通夜の席には、大勢の方々が参列してくれました。通夜振る舞いの席を廻っていると盆踊りの会の方々から「明日藤巻さんを盆踊りで、送り出してやろう」と声が上がりました。早速奥さんに伺ったら「本人も喜ぶと思います」と了解を頂きました。告別式当日、式場から出た棺が玄関ホールに止まりました。棺を十数人の踊り子が囲むと笛・太鼓が鳴り始め、盆踊りが始まりました。

- ♪ ヤー春になれば、桜が一咲くわイエー
〈ヨシヤ-ヨシヤ-〉新川堤で花見するイエー
- ♪ ヤー夏になれば、盆踊りするわイエー
〈ヨシヤ-ヨシヤ-〉上の大神宮でみんなで踊るイエー
- ♪ ヤー秋になれば柿もぎをするんだイエー
〈ヨシヤ-ヨシヤ-〉角田山も紅く染まるイエー
- ♪ ヤー冬になって藤巻さんを送るイエー
〈ヨシヤ-ヨシヤ-〉英弥さんは天国へ行くイエー

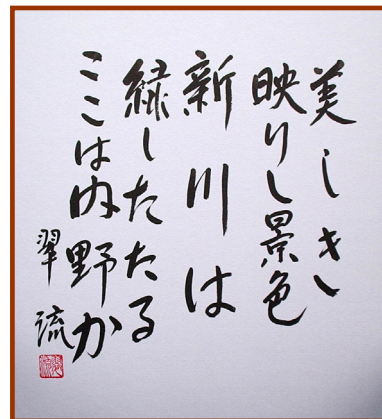
「ばーか賑やかに踊ってたすけ、藤巻さんがお棺から出てきそうらねー」と声が聞こえてきました。そのあと霊柩車に納められた藤巻さんは、四つ角を通り毎年盆踊りを踊った上大神宮を廻り思い出の新川沿いを通って斎場へ向かって行きました。斎場から戻り、初七日・三十五日法要が終わって西遊寺朝倉住職の法話で「盆踊りは、先祖の供養を輪になって踊っていたことから始まった」と話して下さり、ありがたく思いましたし親戚の方々も「盆踊り良か



農作業姿の似合う藤巻さん

ったよ」と言われて藤巻さんも喜んでくれたと思います。本当にお世話になりました。これからは新川・洗堀・内野盆踊り・諸々、藤巻さんから教わった事を伝え守っていきたいと思っております。ありがとうございました。

合掌



笹川 悦夫さん作

新川七色物語 (川柳)

大川 聡(さとる)

- 水路橋 ナニコレに出た 登録だ
- 高山の 蓮久寺にて 記念の日
- 新川で ラーメン食べて 竿垂らし
- 掘割の 人工河川 民救う
- 新川の しじみ食べた 味噌汁で
- 新川の 二十余りの 橋巡り
- 知らないよ 四十八湯 今昔

新川の生き物調査・カヌー川下り体験

安富 佐織

毎年の一大イベントが今年も盛大に行われました。新川にすむ生き物を見て、さわって、そして、舟で風を感じながらいつもとは違う目の高さで新川を航行する、楽しい体験です。

2013年7月21日(日)お天気に恵まれて、にぎやかに始まりました。

地元の町内会や学校にチラシを配ってお知らせしたので、小学生や家族連れの皆さんが大勢来てくれて、今年の参加者は110人を数えました。

朝9時から、前日に新川の数カ所に仕掛けておいた網をあげると、大小様々な魚やカニなどの川の生き物がかかっていました。水草と主に水槽に入れてよく見えるように並べました。それを見ながら、環境調査の専門家から川の生態系や魚の名前や習性について説明を聞きました。昔ながらの投網の実演もありました。



ライフジャケットをしっかりと着けて舟に乗るのよ！

子供達は興味津々で水槽に手を突っ込んで魚をさわっては歓声を上げていました。付き添いの大人たちものぞき込んでいました。

普段見えないけれど、いろんな生き物が新川にはたくさんいるんですね。

ひとしきり魚にさわったら、次は舟です。新川を舟で下ります。

10人乗りの大型カヌーに乗って、みんなでかけ声に合わせて漕ぎます。動力付きのゴムボートで風を切って走るのも爽快です。操縦、乗船下船手伝い、安全見守りスタッフもいて安心です。15分くらいの乗船時間を皆さんとても楽しんでいました。去年は舟に乗るのに長い時間お待たせしてしまった



魚やザリガニに注ぐ子どもたちの目は真剣だ

ので、今年は受付などスタッフを増やしました。

大人用の他に、小さいお子さんたちにも子供用のライフジャケットをサイズを揃えて用意しました。ひとりひとりライフジャケットを着せるのを手伝う係もたくさんいて、乗船準備も時間短縮できました。日本医療福祉専門学校の学生さんが25名も協力してくれたおかげです。若いスタッフが多いと、元気にこやかで子供達も楽しそうですね。



100名以上の方がボートに乗って新川を体験した

舟を下りた方がみんな笑顔で、もっと乗りたい、楽しかったありがとうと言ってくれて、汗みどろで働いていたスタッフのおじちゃんたちも本当にうれしそうでした。疲れが吹っ飛びますね。また来年も！このイベントは新潟市地域活動補助金をいただいて実施しました。こういう活動を続けて、地域に親しまれる新川をますます魅力あるものとして多くの人に愛していただきたいと思います。



イトヨ

新川べりのゴミ拾いに参加して

若杉 銀治

当会では毎年、春と秋に新川べりの一斉清掃を行っている。

①上流域（鎧瀧地区）②中流域（田瀧地区）③下流域（内野地区）の3ヶ所に分かれ、連携して同日に一斉に行い私は、下流域の内野地区に毎回参加している。

この内野地区は、西川水路橋脇に集合し、この地点を中心に、新川上流側班、下流側班、船上班の3班に分かれゴミ拾いをする。

主催は越後新川まちおこしの会で、協力は西地区公民館、新潟市西区役所、西蒲原土地改良区等である。又、この行事は、新潟市地域活動補助金（以前は河川環境管理財団）の助成を得て実施してきた。

(1) 6月23日（日）晴天（9:00～11:00）

当日は、特に内野中学校の生徒が多数参加され、総勢120人、夫々が各班の先導者に従って一斉に川辺りに散会、ゴミ拾いを開始した。

最初は、及び腰で進んでいた中学生も慣れるに従い、若く運動力抜群を活かし、葦原の中へ潜り込んでペットボトル、空カン類を懸命に拾い上げて行き瞬間にゴミ袋は、一杯になる・・・

それを要所々に待機して居る、西区市役所手配の車が、次々と車に積込んで行く、この連携の良さはこの清掃活動の賜物と感心させられた。

集積地点にあつめられたゴミは、約690kgと、その成果は上々であり久し振り、かいた汗と新川の川辺のあたりが、一段と輝いて居る様で清々しい半日でありました。

尚、参加いただいた皆様の「希望者」には「立派な」感謝状をさし上げる事となっており、今回は42枚もの感謝状が発行されたとの事でした。



毎回多くのゴミが集められる

(2) 10月6日（日）薄曇り

新川健康&クリーンウォークと銘打って今年2回目の秋の一斉新川清掃が行なわれた。

今回はNPO法人荒川クリーンエイドフォーラムの伊藤さん他2名の方々が、わざわざ東京より参加され、収集したゴミの分別方法を指導していただいた。このメンバーは、全国河川のゴミ状況を調査・データベース化し、日本の河川クリーン化の一助とする活動を行って居られるとの事でした。

今回の秋のクリーンウォークは残念ながら前回多数参加の内野中学生は学校行事と重なったとかで若干名の参加に留まり、参加人数は、45名でした。前回の春同様、西川水路橋を中心に、新川上流・下流側・船上班と田瀧排水機場班とにわかれ夫々活動を開始した。

クリーン作戦の結果は、次の通りでした。

・ゴミ総量	156kg
うち可燃ゴミ	120kg
不燃ゴミ	36kg
個別・飲料用ペットボトル	527本
・その他飲料缶・プラスチック容器類等	

毎回この行事に参加して思うこと

新川は、その特性上（人口的に開削された河川）であり、他河川と違い急激な大洪水になりにくく、いつも悠然と静かに流れる河川であるが、確実に海へと流れ下る川である。

その悠然とした流れに乗りゴミは、休む事なく上流から下流へと流れ下る。又、岸辺の堤、あるいは、橋より捨てられたゴミは、その付近に漂っている。これらのゴミの絶滅は、年2回のクリーン活動では到底抑えられない。各自夫々が川を汚さないと肝に銘じ、折角汗して開削した先人達の苦勞を思い、きれいで恵みある川となるよう願ってやまない。



新川一斉清掃参加者の皆さん

西川について

佐藤 莊威

私が中野小屋地区西川を守る会の会長になって、三年がたちました。自分が西川についてこんなにも知らない事があったのかとの思いが、正直なところ です。まず西川の歴史です。

約四百年前、上杉謙信の時代西川が西信濃川と言われ、東信濃川より川幅が広がったそうです。それで川の中に農地を作り始めたこと、その農地が優良農地であった事が年々の農地を広げてきた原因でした。徳川時代になると川の東側は長岡藩、西側は天領となりました。

今から約二百年前、新川の掘削が始まった頃、中野小屋村史に一つの訴訟事件が持ち上がりました。それは、農地を広げる事に一生懸命になるあまり川幅が狭くなり、大水が出ると対岸が決壊し洪水となり内野まで災害を起こしていたからです。

以後、大河津分水が完成、一方新川の暗闇は、水路橋へとなり現在に至るわけです。新潟地震のとき、干ばつになり水不足から、補水の揚水機場を何か所も作りそれ以後西川の下流は、ほとんどこの補水で賄うことになっています。

これですべては、良くなっていて災害も起きず、何もいう事はないではないかと私も思っていました。所がこれは、とんでもない思い違いをしていたんだなという事が分かり始めました。



西川の護岸工事予定場所

先人たちが、試行錯誤を繰り返しながら、必死に自分たちの生活のため、この地域のため現在の美田を作り上げて来た、この苦労の上に私たちは、どっぷりとあぐらをかいていたんだなあ、そんな思いが致します。昔の人の戒めの格言に『美田を子孫に残すな』があります。



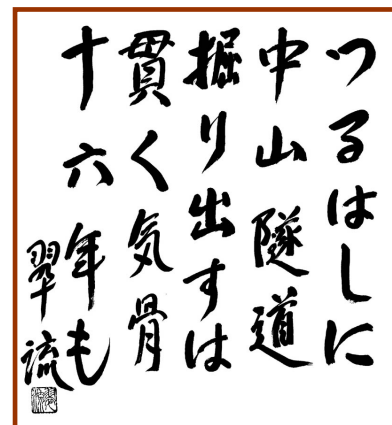
西川の浚渫予定場所

現在の西川については、もちろん問題点がいろいろありますが、浚渫と護岸の事業が着手されています。この施工前の写真を添付しました。新川の右岸排水機場が今年から稼働を始めました。何も対策をしていない西川の現況と比較してみてください。



新装になった新川右岸排水機場

この工事まで、越後新川まちおこしの会の皆様、県議の高橋直輝様に大きなご協力とご助言をいただきました事をこの紙面をおかりしてお礼申し上げます。



笹川 悦夫さん作

新川右岸排水機場跡地公園事業の紹介

山岸 俊男

標記公園事業は、当会の前事務局長をされていた丸山先生の悲願の事業である。当時、世話人の1人として丸山先生の後について農水省新川工事事務所などへ陳情にゆくと、先生は決まって「あなたがたが新川で実施している330億円の事業費の1%でよいから地域への還元をしても良いではないか」と食い下がっていたのが、昨日のように思い出される。

先生はその予算で公園ができないことを承知しての上での役人とのやり取りである。先生がお亡くなりになった後は、我々会員がその遺志をついで、何としても実現せねばならないと思ったのである。

標記排水機場は昭和28年に建造され、新川沿川の海拔0m以下の水田、畑、農地周辺に広がる宅地等の浸水被害防止に大きな役割を果たしてきた。それが60年の歳月を経て、施設や機器類が老朽化して更新の時期を迎えたため、平成21年からその隣に新しい排水機場の建設が着手され、平成25年に完成し運転されている。

旧施設は趣があり美しい景観を保っていた。また内部のポンプ施設を含めて産業文化財の価値が十分にあるとして、その保存運動を起こしたのである。



旧新川右岸排水機場(ポンプ5台)

しかし、保存した施設を維持する費用が莫大に要することから断念した。それではポンプだけでも残せないか、ということになった。

この旧排水機場は、地域の宝でもあり何とか施設の一部を残し、次の世代に伝えてゆかねばならないと考えている。

ついては、新排水機場の工事作業ヤードに使用している場所が、次の更新時期(約50年後)まで公園として使用できることになった。ここにポンプを展示し、解体施設の廃材を利用してテーブル、椅子などを計画した。

そして、農水省新川工事事務所へ当会だけでなく

地域の自治会長などとの連名で陳情をおこなった。なんと新川工事事務所の回答が、ポンプのスクラップ代金3億円を用意できますか?ときた。

なんたることか、一般市民に億の金額を言えば、あきらめるだろうとの考えが見え見えである。そこで役人のあり方から地方勤務の時のあり方、生き方などを議論して事務所を後にした。

それ以降、新潟市の西区役所とも連携して新川工事事務所との折衝はスムーズになり、当会の計画にそって進められることになった。

当初は市の地域活動補助金20万円でポンプ等の設置費用を賄う予定であったが、とても足りない困っていたところ、西区役所建設課長の小林さんから「みずつち文化創造」の補助金50万円事業があるので応募したらとの話があった。

早速、応募したところ45万円の決定額である。それから、また忙しい、ポンプ設置台の設計を初めシングル鉄筋で提示したら、鉄筋量が不足ではないかとのこと、鉄筋径を落としてダブルにしたが、費用が増大した。次に測量して配置位置、高さ等を出して、基礎造成、鉄筋組立、型枠、コンクリート打設、養生と多忙をきわめた。

そのつど新川工事事務所の監督官が来てチェックしていたが、当会の佐藤正人さんの入念な施工さばきに安心したのか後半は当会にまかせきりとなった。



Co打設の佐藤さんと小泉さん

今後の予定は、公園名の決定を1月、テーブル、椅子を4月に施工して、5月末にオープンを予定しています。地域の多くの方々からの公園のご利用を期待しています。



ポンプ設置中

東日本大震災から2年半、南相馬市を訪ねて

加藤 功

川のつながりで知り合った、南相馬市の太田川で活動している大田地区まちづくり委員会（きれいな太田川～恵みを次世代に～）を少しでも応援したく、今年は「相馬野馬追い」を兼ねて南相馬市を訪ねた。

平成24年4月16日、警戒区域と計画的避難区域と緊急時避難準備区域が見直され、市内のほとんどが日中は立ち入りが出来ることになった。だが山間部には、帰宅困難地域一部も存在しており、震災以前の生活には程遠い現状であった。

南相馬市に向かう途中には、除染の土を詰めた黒い土嚢を積み上げた仮置場の点在する飯館村を通過したが、昨年同様に住民の姿を見つけれなかった。

「相馬野馬追」

国の重要無形民俗文化財の相馬野馬追は、相馬氏の祖である平将門が原野に放してあった野馬を捕らえる軍事訓練と、捕らえた馬を神前に奉納したことに由来し、千余年の歴史を誇り、史跡中村跡での総大将の出陣式を皮切りに、約500余騎の騎馬武者が、戦国時代絵巻を3日間にわたって現代の私たちに披露してくれる伝統行事である。

◆ 2013年 相馬野馬追「太田神社出陣式」

相馬藩の領内には太田神社の他に中村神社、小高神社と併せて相馬三妙見社があり、各神社で馬追い出陣式を行っている。私たちは太田神社に向かった。

12時、「出陣」の声と共に出身地と名前を呼ばれた武者がゆっくりと馬を進めてゆく。アスファルトに響く蹄鉄の音と馬のいななきは、私たちが戦国の世界に引き込んで行くに十分であった。

◆ 2013年 相馬野馬追「お行列」見物

雲雀ヶ原祭場手前にてお行列を待つ。法螺貝の合図とともに、先祖代々の旗指物と甲冑姿の騎馬が続々とやってくる。例年500旗と言われ、今年は450旗を数え復興の手がかりとなった。また私たちも観客約5万8千人の一人として戦国絵巻を堪能した。



雲雀ヶ原祭場へ向かう甲冑姿の騎馬武者

◆ 2013年 相馬野馬追「甲冑競馬」観戦

昨年、震災により中断していた相馬野馬追のメイン行事「甲冑競馬」は、2年ぶりに開催され45騎が出場した。今年は8レース54騎が先祖伝来の旗指物をなびかせながら疾走した。

約280騎が出場した神旗争奪戦の雲雀ヶ原祭場地には、勇壮な戦国絵巻を一目見ようと42,000名の観客が詰めかけた。

初めて目にする馬場を駆け抜ける人馬一体はさすがしく、この付近が東京電力福島第一発電所より22km地点であることを忘れさせていた。

新潟に帰るため神旗争奪戦の途中で会場を後にしたが、私の耳にはいつまでも歓声が響いていた。

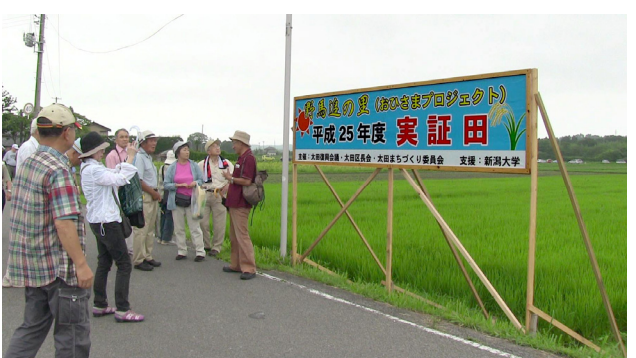


背に旗差物つけて疾走する騎馬

◎ おひさまプロジェクト実証田

2011年の事故後、国は南相馬市全域で米の作付けを制限してきた。その後避難指示区域を除く地域で制限を解除したが、農地除染が実施されていないことや放射性物質への不安から、市が作付けを自粛してきた。だが、伝統ある相馬野馬追の太田神社から出陣の行列を盛り上ようと、神社前の水田に新潟大学支援による実証田があった。

9月に再度訪れた時、稲はたわわに実り頭を垂れていた。これから私たちは、東日本大震災と福島の実現を忘れないで伝えてゆく役割を担っている。



太田神社前野おひさまプロジェクト実証田

～中山隧道 錦鯉 闘牛 枋尾～

笹川 悦夫

2013年10月13日午前8時天候晴れ JR内野駅に集合、マイクロバスに参加者18名乗車、出発す。同行の山岸俊男「掘るまいか」上映委員会代表さんよりアナウンス司会進行で、本日の行程、時間等の案内があり。高速道を巻、瀧東。三条、燕。中之島、見附。長岡各インターを経て、目的地、山古志へ。山古志に近くなると、急カーブの道路、複数のトンネルを通過して行くと、のどかなる山里に至り、遠くに東山連峰あり。山肌に棚田が見え、遙かなるふるさとを想します。自転車は見かけぬ。自動二輪か軽トラック。普通自動車は、稀にしか見られない。歩行をしてみて確かに思いのほか足の運びがきついです。暮しには、厳しい土地と思うのみである。

棚田に見入る。夜の景色は、星空にあると言う。一瞬の写真を撮りての楽しみはこの上ない喜びでしょう。里山はいかに、山古志ならでしょう。

中山隧道

いよいよ待望の手掘りトンネル中山隧道に到着す。入口左側、上に掲示板あり。この隧道は、中山隧道という。山古志村小松倉から広神村水沢新田を結ぶ延長877mの隧道である。人を通す手掘りの隧道としては、日本一の長さと言われている。今でもツルハシの跡が当時のまま残り、先人たちの偉大なエネルギーと苦労と感動を伝えてくれる。

山岸さんの紹介により「掘るまいか」に出演なされた小川晴司さんより当時の撮影状況、体験のお話を伺う。小川さんは、撮影時の様子を全身で手真似、手を上げたり、腕を広げ下げたり身をかがめて、ご披露なさいました。皆一行は、感銘を貰いました。

中山隧道に入り、右側にパネル板あり、中山隧道の掘削の経緯。目的は、子々孫々暮らしの安からんことを願い、我らのツルハシで掘り抜き、49年間村を支えてきた。今はその役割を中山トンネルに引き継いだと説明してあった。

壁の手掘り跡に触れてみると冷たく、ツルハシの削り痛々しいほど、感じられてなりません、坑内は、暗く、足元もでこぼこし、歩行はゆっくりと進むしかありません。しばらくすると裸電球に出会い、待避個所に設置されており更に進むと落盤地点、地下水が溢れ出た処、間もなく頭上に貫通点表示に至る、この箇所は幅広く掘削されています。

冬は孤立集落の暮しゆえ、昭和初期岩盤を掘り始め中断せしも不屈の歳月と命を懸けて隧道を掘り成しえたり。掘り人たる気骨の証しを現地にて知りました。越後人模範なり、日本人の誇りでしょう。

このように、この中山隧道は歴史的にも文化的にも優れた価値が認められました。地域住民自ら隧道掘削を決意し掘り抜いた有様が公共事業の原点にあたることから、近代土木遺産としてトンネル技術者、地質関係者など多くの技術者の注目を集めている。

錦鯉の見学

泳ぐ宝石に例えられている。飼育処に見学した水槽の中の錦鯉、価格は、勘でなさる由。窺い知る。山古志地域を含む古志郡二十村郷で発祥し、世界へ普及した。色とりどりの錦鯉が愛好家の目を楽しませ心を癒しています。

木籠(こごも)郷見庵(さとみあん)交流施設

1階は直売所、2階は中越地震に関する情報を展示する資料館です。こちらにて昼食。コシヒカリのご飯、肉汁、山古志牛の味、空腹の身体に旨さは抜群でついお代わりせし、漬物にカグラナンバン味噌。名前の由来は、面の形が神楽に似ての由。味は、かくべつ、地産の誇る逸品なり、この地木籠・里見庵から眼下を見ると、地震によりせき止められて、芋川により水没した家屋が見られる。ここは、荒地となり草は生い茂り、川は、埋まり複数の家屋も沈みて、近くにひとときわ大きい別棟つづきの豪邸が屋根にビニールシートでスッポリ被されており一階は、埋没し完全に沈んでいます。

何としても自然界の脅威の有り様を記憶に伝えるべきでしょう。石の道標には、「千年の一步。日本の故郷。地震で沈んだ村、皆の力でここに、よみがえる。」と刻まれていました。



太石の道標を背に参加者全員写真を撮る

編集後記

小泉 勇

闘牛

急な登り道をしばらく歩きつづけると、左方向に牛が並列して4頭、幾組も斜面に多数の牛が繋がれており、中には、鼻に紅白の綱牛、風格あり、ススキを背なに出陣待ちの情景に出会いました。更に進むと明るい闘牛場に着いた。

かなりの広さにコンクリートの観覧席が右に2面4段柱は、白く輝いて頑丈な建設と察します。自然林に囲まれた中の闘牛場、前面の斜面に数段の席あり、一面のみ樹林まで観客段に、左手前は、闘牛の出入り口、向こうにも同じ、開閉扉が設置されています。左側は、高い壁、衝立で、観客席が5段で見やすい。

牛の入場に勢子（せこ）の気合いがとび牛同士の闘いが始まります。足の運びが、ゆったりとした牛と牛が鼻を突き合わせて押し合いをし、攻め込もうとして首の奪い合いをする。自分の角で相手の角を掛ける技。鼻で相手の顔をすくい上げたり頭に打ち込む。中には、頭を突き合わない状態で、にらみ合いをする牛同士の駆け引き。相手の攻めを自分全体の体重と身体の柔らかさを使って受ける牛。勇壮な牛の角突きは、手に汗握る迫力がある。

闘牛対戦中は、水色の紋入り揃い6人、両手に綱を背なの腰に。含む10数人囲みて、一瞬の捌きに懸けています。鼻突き合わせて押し合いを押された方が負けと判断した、直前に後足に綱をからめて勢子が引き離す。

牛の角突きは、「引き分け」が原則で昔より、地域では、牛の勝った、負けたを楽しむのではなく、牛と勢子とお客さんが一体となった対戦をして、お互いの健闘を称えながら、引き分けにする。時の牛と勢子の真剣勝負が見ものです。震災から9年。地域に愛して、やまない、牛に。闘牛大会、朝より始終会場に参集の皆さんに尽くされておられた、長島忠美衆議院議員の姿が印象的、脳裏に離れずに思い起こされます。

午後3時半闘牛のさなかに退場しまして、次の訪問地4時栃尾、全国名水百選「杜々（とど）の森」に立ち寄る。道中栃尾名産油揚げを各人求めたり。

この地から帰路に、午後6時10分JR内野駅前到着。解散す。

会員の皆様、お元気で新しい年を迎えられたこと、お慶び申し上げます。

当会は、平成19年2月に設立し7年目に入ります。その時中心的役割を果たした故丸山幸平さんは、こんな事を主張しています。『「泳いだ、食べた新川」の再生を目指し、地道に着実に歩みを進めたいと念願しています。その実現の為、環境の整備には、国、市などの行政、土地改良区、農家の方々、また、上流にある工場団地の企業の方々のご協力と、ともに会員各位のご協力で進めたいと、強く念願しています』。まさにその通りで、皆様のご協力が無ければ実現できないでしょう。

今回は、中原八一議員さんから多忙の所、巻頭言を頂き有難うございました。そして例年の如く堤防のゴミ拾いの他、EM菌によるドブ川の洗掘浄化活動(浜倉、山上さん)、昨年に引き続き山古志の中山隧道と闘牛の見学会(笹川さん)、高齢化社会における若い介護士に焦点をあてたヘルプマン上演(星さん)。現在新しく工事中の新川右岸排水機場跡地公園(仮称)(山岸さん)は、今までの経過を詳しく述べられています。その他多数の原稿を頂きまして有難うございました。



ホトケノザ

新川通信・7号

年1回発行

(現在会員数 100名)

●発行：越後新川まちおこしの会

●事務局：新潟市西区内野山手2-18-8-6

小泉 勇

電話・FAX 025-261-0235

E-mail: iikoi@r6.dion.ne.jp

入会案内

本会は、新潟市内を流れる西川と新川の立体交差などの近代文化遺産とも言える、新川の歴史およびその流域で育かれた産業や文化について理解を深め、その環境保全につとめながらさまざまな活動を通じて、流域および周辺地域のまちおこしに寄与することを目的に平成19年2月に発足しました。年会費1,000円です。ご入会をお待ちしています。